

二〇〇二年 しずおか

連なる詩の会

「大流星群」の巻

創作 二〇〇一年十月十四日 水戸二十三日 金 ホテルセンモリー 静岡
発表 二〇〇二年十月十四日 土 グランシップ十二階会議ホール 風



星は流れ、過去へ、未来へ。 敬愛する生命に、自然なる眺めに。 連なる四十編の詩たち。

プロローグを告げたのは、獅子座流星群。それはまるで遙か北欧の地からやってきた二人の詩人を迎えるかのように、晩秋の未明、東の空に光の帯を放った。そして、これが大流星群が夜空に舞った 久しぶりにて始まる発句となつた。

一 昨年がドイツ、昨年は中国。三回目の今年、北欧の詩人を迎えての創作である。ゲストのお国柄はも

ちろん、その顔ぶれにも、綴られていく風景や色合い、世界感が全く異なる。いつもの、詩の面白さかもしれない。例年通り今回もさばき手を務めた大岡信氏は、グランシップで行われた発表の席で、北欧の詩には音楽的なセンスがあるので、言葉の響きもぜひ楽しんでほしい」といって、非常に和やかに、最もスムーズに進み、作品もいちばん開かれていて、最も連詩らしいものになつたと思つたと語つた。

ゲストの一人、ニルス・アスラク・ヴァルケアパー氏(愛称アイル)は、トナカイ遊牧民族サーミン人の血を受け、リトルノール冬季五輪の開会式では原住民族を代表して歌を披露したことも知られる。その後、大事故に遭つた氏にして、最も敬愛すべきは生命であり、詩の創作こそ喜びであると語り、独特の詩世界、言葉の宇宙で繋いだ。また、もつ一人のゲスト、カイ・エミネン氏は、流ちょうな日本語で、一人で作る詩も会話には違いないが、今回五人で詩の会話ができたことは大事な」と語つた。しかし、残念なことに、アイル氏は帰国直後、自らが流星となり、急逝されてしまった。なお、発表会では、創作した詩を各自が順に朗読し、その後、一編ずつが解説された。

高橋睦郎

たかはしむつお
21歳で処女詩集『ミノ・あたしの雄牛』を発表。62年福岡教育大学卒。以後、64年『薔薇の木・にせの恋人たち』、65年に三島由紀夫の跋文をもつ『眠りと犯しと落下と』を刊行し、詩壇に登場。詩集『王国の構造』、『島崎藤村記念歴史賞』『兎の庭』(高見順賞)など。句作、歌作にも親しみ、また、能、歌舞伎、演劇に造詣が深く、句歌集『稽古飲食』(読売文学賞)、『台本修辞』、『女王メデア』、『グローバル国際交流基金山本健吉賞』など。小説『聖三角形』、『詩論集』、『恋のヒント』ほか著書多数。37年福岡県生まれ。



カイ・ニエミネン

Kai Nieminen
ヘルシンキ大学にて哲学、音楽学を学ぶ。79年より一年間日本滞在、日本文学を研究。帰国後、ヘルシンキ大学にて日本文学史の講座を担当。知日家として知られ、国際交流基金から国際交流奨励賞を、フィンランドの作家協会であるエノ・レイノ協会から文学賞を受賞。詩集『わたしは知らない』、『フィンランド政府文学賞』『揺れ動く大地』など。翻訳作品は吉本ばななから源氏物語まで多数。なかでも開高健『夏の間』、松尾芭蕉『奥の細道』、『源氏物語第四巻』の翻訳がフィンランド政府翻訳家賞受賞。50年生まれ。



大洋に浮かぶ船あり、ボトルの中の船あり。
愛する二人は、どこまでもいつしよに。

【第九編 第十三編】

アイル…大きな海、大洋には私にらて
関心がある一方、高橋さんの、火事、同
様、怖いものでもありません。船が私の
思いを運んでいくくれるんじゃないか
と、この詩を書きました。

涼…アイルさんの思いの深さ、広がり
を、私はグッと小さい「ボトルの中」に
組み立てられる「船」に移して。小さ
な飾り物の船でも、太陽の「陽射し」
は時刻とともに動いていくという、
その情景を書いてみました。

睦郎…「冬の陽射し」から連想するの
は、なぜか、蠅です。砂漠でフロント
ガラスに蠅が現れると、しばらくして
集落がある。そういう意味で人間に
最も親しい友達だと。「アララト」は
方舟が辿り着いた山「ゲヘンナ」は地
獄のことです。

カイ…何処までもいつしよに」という
フレーズから愛するカップルを連想し
ました。今はなくなりましただけど、
昔は契りがあったんですね。
信…カイさんのラブレターの一節には
ご馳走様と、(笑)そのままでは甘った
るくて、というよりも僕にはできなか
らうと、ガラッと調子を変えました。

九 大洋。抱擁し、激怒し。
一つに。別れ別れに。

そして船たち、過ぎゆき、
思いを連れ去る。何処かへと。
思いの海の 沖へと。

十 ボトルの中の帆船
ピンセットで正す触先
冬の陽射しはそこから左へゆっくり旋回

十一 蠅よ
私たちの六百万年の最愛の同行よ

何処までもいつしよに
アララトの光へでも
ゲヘンナの闇へでも

十二 どこまでも、いつしよに
わたしはあなたの夢に、
あなたはわたしの夢の中に。

十三 呻きと悲鳴を押し包み
鮮血のベルト地帯が
どんなにわたしらを締めつけようとも

朝ごとに葉っぱは露をたっぶり宿す
わたしらの目を映しながら

十四 生命の
唯一の目的
生命を生きたままに保つこと。

十五 風が通り抜けてゆく
トナカイの杖状の角の合間を
それが 今日目的
そんな風の遊び

滑らかなうぶ毛 その匂いをすくって

十六 風が海から、河をつたって
大都會の中心へと
空にのぼる風、二つ、三つ、そして十

十七 気も付かぬうちに忍び寄るタバ
昼は疲弊する。昼の形も、色たちも。
しかしなお望みは若々しく生きている
いまも 明日が誘う。

わたしが歩を引きするのはいつのこと？

アイル

涼

睦郎

カイ

信

アイル

涼

カイ

アイル

大岡 信

おおおかまこと

東京大学文学部卒業。学生時代に日野啓三、丸山一郎、稲葉三千男らと雑誌『現代文学』創刊。54年に詩誌『権』に参加。今日までに多くの詩を発表。詩集に『春 少女に』、『擲げらうた50篇』など。連詩の提唱者であり、第一人者でもある。ほかに著書『折々のうた』通巻16冊、菊池寛賞『連詩の愉しみ』、『ヨーロッパで連詩を巻く』、『うたげと孤心』など。96年にはマケドニアのストルーガ詩祭にて金冠賞受賞。31年静岡県三島市生まれ。



連詩は、連句や連歌の美学をベースにした創作現代詩であり、毎年さばき手を担う大岡信氏は、その提唱者であり、第一人者である。連詩には決まった形式はないが、会では五行と三行の詩を交互に繰り返すフォームをとっている。それぞれの詩の中には、さまざまな視点、モチーフが折り込まれ、そうした前の詩を受けて、別の詩人が後の詩を創作し、繋いでいく。ときには、参加者でさえ、その前後の詩の共通項がわからないこともある。完成の翌日に行われた発表の席では、そんな繋がりを解くことを目的として、作者による解説も行われた。以下はその解説の抜粋である。

彗星の塵が光に。遠来の客を迎える挨拶に。そして、壮大な宇宙から、子供のほづべたに。

【第一編、第五編】

信…この連詩がちよつと獅子座流星群が舞った日から始まったので、これをテーマにしよつと。一番の詩は、だいたいこんな風に遠来の詩人を迎える挨拶も兼ねたりします。

カイ…流星の光から連想した、大地が光となる。夜、ホテルの部屋から見た車のライトの流れ。富士山はホテルの部屋から見ても見事な景色でした。

睦郎…カイさんは、ほつきりと富士山とは言うてませんが、それを受けて、田子の浦ゆ…と詠んだ(山部)赤人もなども見たとし、視点を波に移しました。そして、余計なことですが、未来への挨拶も送ったつもりです。

アイル…地球の反対側にも来て来て、日本はいろいろ違つけれど、我々に似た見慣れた顔つきをした人がたくさんいた、それがうれしかったという詩です。

涼…宇宙的な壮大な話がアイルさんの「類」まで降りてきたので、私はほづべたで書いていこうと。地球の反対側もくしゃみしたり、かんしゃくを起こしたりするのは同じだろつと思いました。

一 大流星群が夜空に舞った 久しぶりに

彗星のまき散らした塵が

大氣に触れては燃え上がるのだ

白夜の地方からやって来た友らよ ぼくらも

燃え立たせよう この触れ合いから 互いの言葉を

信

二 空が暮れて、大地が光の流れとなる前に

何か 赤く、遠い白みが赤々と染まり、そしてまったく消え去る

これはいつも不思議、それをまたわたしは 見ることがあるのだろうか…

カイ

三 赤人も見た 芭蕉も見た 北斎も見た

その高い雪にむけて しらしらと 波が寄せる

その波を あなたがたも見ると 私は記録する

五百年後 一千年後 同じ波を見る人々のために

その時まで この地球が無事ならよいのだが

睦郎

四 母なる地の向こうがわ

習慣もちがい、言葉もちがう

けれど 類はいつものお馴染み

アイル

五 積み木を積み重ねてゆく幼い子ども

くしゃみひとつ

手元のバランスに呼び込まれる

かんしゃく なみだ

それも 子どものいとなみ

涼

六 猫はどんな姿勢で投げられても

やんわり 機敏に着地する

人間という重たい種族は学ぶことばかり

信

七 朝早く

窓の外は

ペリー泥棒の密かな羽ばたき

と突然、ツグミの母鳥の

急を告げる叫び声

カイ

八 橋の上の驚愕に開いたままの口

橋の行く先は

いや こちらがわも 火事

睦郎

大倉純一郎

おおくらじゅんいちろう
72年早稲田大学第一文学部卒。84年ヘルシンキ大学文学部卒。以降、ヘルシンキ工科大学にて、92年以降はヘルシンキ地方夏期大学にて日本語講師に。93年フィンランド・日本語日本文化教師会創設、以来会長を務める。00年以降はヘルシンキ大学非常勤講師。翻訳多数。48年長野県生まれ。



木坂 涼

きさかりょう
和光大学人文学部卒。詩集『ツツツと』で現代詩花椿賞、『金色の網』で芸術選奨文部大臣新人賞を受賞。ほかに『南南東』『小さな表札』『木坂涼詩集』『陽のテーブルクロス』『五つのエラーをさがせ!』など。エッセイ集『ニューヨーク便り』『おとこ親の書いたことものの詩』『四季のつた』のほか、翻訳絵本も手掛け、『みんなおっぱいのんでたよ』『カレンダーのはなし』などがある。58年埼玉県生まれ。



コック帽は、ハートのキングの王冠のよう。
生命のカードには、誰も勝てない…。

【第十七編 第三十編】

睦郎…食べる側から提供する側のほうに視点を移してはるんですが、こころ言っていることは、私が子供の頃に本当に思ったことで、コックさんの白い帽子が素晴らしく見えただけです。

涼…前の詩から「王冠」をいただいて、トランプの世界に場を移しました。「ハートのキング」が、円環をめぐるといっは、この連詩の繋がりに似ていて、そこに「ジョーカーもまた」あるかもしれないと、思ったりしました。

アイル…トランプのカードから、生命のカードへ。王様にしても、皇帝にしても、生命のカードには勝てないけれど、私はそんなオールマイティである生命が自分を奏でてくれることだけを望んでいるという事です。

信…文化的な意味での音楽があるとき生まれました。つまり文化はあるとき生まれると。でも、それ以前から悠々と流れている生命があるという事です。カイン…前の三行の詩に「唇」が出てきて、やはり恋の詩になりました。(笑)

二十七

ひたすらコックさんに憧れた なりたかった
野菜たちも 果実たちも 香料たちもみんな平伏
魚たちも 鳥たちも 獣たちも屈伏させて
勿論 唾を溜め目を輝かせた人間どもも睥睨して
王冠よりも高く聳える白帽を戴き ふんり返り返って

二十八

ハートのキングは円環をめぐると
今、誰の手のうちにそれはある？
ジョーカーもまた

二十九

天下無双の生命のカード
その前では王様も、皇帝も
跪かねばならない。
わたしはアイルという笛
生命が奏でてくれるのを喜んで待っている

三十

人間の唇が筆に触れて
世界最初のメロディーが流れた日にも
あぶくのような卵に囲まれ 蛙は幸せだった

三十一

忙しい日
気がかりなこといっぱい言葉
ひきつった顔
そして サウナに入った今
君の唇はこんなにも柔らか

三十二

激しい愛の後に来るのは
夢も見ない深い眠り
底のない 快い落下！

三十三

ブランコをこぎながら
靴を放った 遠くへ 夕日の方へ
放ったところまで 片足で跳ねていく
靴を履いて ブランコにもどる
「明日天気になれあれ！」

三十四

波の揺りかごとと漕ぎだす
水平線にまぼろしの雲たち
海が子守唄をささやく

三十五

子守唄で育った子でも
長ずれば荒くれ男になる奴もある
首を刎ねた敵の頭で
フットボールを発明した男さえある
神話時代の話だろうが なに今だって

睦郎

涼

アイル

信

カイ

睦郎

涼

アイル

信

ニルス=アスラク・ヴァルケアパー

(愛称アイル) Nils-Aslak Valkeapää
トナカイ遊牧サーツミ人の両親の間に生まれる。エストニア共和国から勲章白い星受章、フィンランド・オウル大学から文学名誉博士号、ラップランド大学から教育学名誉博士号を授与。ライフワークに対し北欧文学賞受賞。95年札幌で開催の極北民族祭で能『白霜頭』を基にしたヨイク詩劇を発表、主人公を演じた。アイヌ民族と親交もあり、しばしば来日。叙情詩集『家は心のつちに』。サーツミ民族史を盛り込んだ写真入り詩集『お日様、わたしのお父様』(北欧理事会文学賞)など。音楽家、画家、俳優としても活躍。43年生まれ。



アイル氏は発表会翌々日の十一月二十六日午後、フィンランド・ヘルシンキ市内の大倉氏宅で急逝された。大倉氏によると、今回のしずおか連詩の会への参加について、「少数民族である自分とその芸術を受け入れてくれて本当にうれしい」富士山を毎日見ることができて、いいリハビリになったと話していたという。

生命のリズム。生活の中の音楽。 静岡の空は明るく、秋の風景が色づいている。

【第十九編 第二十三編】

睦郎…大岡さんから「リズム」と「酒」をいただいて。酒の權入れから「リズム」やエネルギーをつくるには、それを一度かきまわすことが必要だと。「カチャーシー」は沖繩の言葉で、「カチャーシーカオス 混沌」はKで始まるアリタナシヨウノ頭韻です。

涼…特別な楽器を持たなくても、音楽は生まれると。それをオーケストラのほつ音で書いてみました。開演前の様子をつたっています。

カイ…耳の中にも音があつて、すなわちそれは風の音や生活の中の音で、その音は「オーケストラによるコンサートとは違って」休みなくあるといこととです。

アイル…カイさんは、自然の中の音や声、田舎の風景を言ってますが、ふと静岡の街を見ると、新聞社のヘリコプターが現れて、バタバタというその振動が私の心にも感じられ、それを表現したいと思いました。

信…「見下ろす」のは、先ほどの「ヘリコプター」からです。これまで人事の詩が多く続きましたので、自然界の風景を入れたいと、こうすると連詩全体が安らかになるし、活性化されるということもあります。

十八 リズムをもつて生きていこう。

カイコは糸を吐き出す、プツプツと。酒は醗酵している、ゴボゴボと。

十九 かき廻し かき廻し 鳥ひとたち

さし上げた両手で つき出した両足で
月をかき廻し 星たちをかき廻し
時をかきまわし 空をかき廻し
カチャーシー カオス 混沌

二十 ステージには

オーケストラのためのぐるりのイス、譜面台、楽譜
メツザポーチエ は いましばらく客席のもの

二十一 風のひゅーと鳴る音をつんざいて

鼻の叫び。暖炉ではちばち撥ねる火。
風は部屋の隅を響る。
朝から晩まで、晩から朝まで…
このコンサートに休憩はない。

二十二 雲一つない南の空。

都市の上にはヘリコプター。
想いの震えが感じられる 感覚の中にも、心の中にも。

二十三 見おろす砂丘のはずれに

赤い絨毯模様がひろがる
秋は曼珠沙華のつべんで満開
地平線のむこうから しずしずと
満月ものぼってくる

二十四 のぼつておいで 未来の子どもたち

かわりに 下りていく私たち
むしる安らぎに満ち 喜びに満ちて

二十五 二〇〇一年十一月二十日

ひかり一六三号十一号車四番E席
二度と訪れることのないこの数字にのつて
わたしはこの二十五階へやってきた
それから二日目 あと二日

二十六 肉、魚、蝦、野菜、蝸牛

ワイン、ビール、酒、ウイスキー
そして残るは 美味しそうな二日間！

信

睦郎

涼

カイ

アイル

信

睦郎

涼

カイ



喜びとともに仕事に向かった三日間。そして、旅立ちが始まり。いつか再び。

【第三十六編、第四十編】

涼 前の詩の「子守歌」で育った子供が思いもよらない事件を起こすという現実を受けて、「鏡の前」でお洋服のことはかりを考えてる。「オシャレさん」と、若い人たちへの皮肉を入れてけれども、若い人たちだけじゃないのでは？というのが最後の一行です。

睦郎 「どこかの政府」とは日本ですね。僕は日本の大國意識が嫌い、国は小さく、人も少なくという、老子が言った「小國寡民」という節を五行にしました。

信 睦郎さんの中国の古い時代の詩から、中国の昔の農民などを念頭に置いて作った詩です。昔、斜面をせうせと耕していた、そういう祖先の遺伝子は今でも一人一人の中にあるはずだ。「健在なれ」という思いを込めて、この詩を作りました。

カイ 前の詩の姿を三日間の我々の「仕事」に重ねました。天国というのはどんなところからというと、我々のように「喜んで仕事を」するところだと思っただけです。

アイル これが最後の詩です。どこかへ旅立つときは寂しいものですが、それは「出発」であり、「向こう」に「到着する」ことでもあります。今後もみなさんの胸の中に私を迎えてくれるスペースがあってくれるよう願っています。

三十六 鏡の前のオシャレさん！
衣類だけでなく首もすげ替えるの？
どこかの政府を見習って？

涼

三十七 国は小さい方がいいな
誰もか誰もを知っている
ニワトリが鬨をつくり イヌが吠え
あの垣にも この庭にも モモが咲いて
夜が明け 日が闌け はずかに日暮

睦郎

三十八 耕していけば天に達する
そう信じて斜面の畑地を耕しつづけた
祖先の遺伝子 健在なれ 今も

信

三十九 仕事の後はお祭りだ。
そして お祭りの後は休息。
休息の後にはまた新しい仕事。
天国は退屈するための場所じゃない、
喜んで仕事をさせてもらうところにこそ天国がある。

信

四十 出発する 到着するために。
遠くに行く、 近くにあるために
きみの心の。

アイル

創作 二〇〇一年十一月二十一日(水)起
同月二十三日(金)満尾

於 ホテルセンチュリー静岡

参加者 詩人 大岡 信

カイ・ニエミネン

ニルスリアスラク・ヴァルケアパー(アイル)

木坂 涼

高橋睦郎

翻訳者 大倉純一郎

発表 二〇〇一年十一月二十四日(土)
於 グランシップ十一階会議ホール・風



静岡能

グランシップ

一月二十七日(日)

午後一時開場

午後一時三十分開演

グランシップ中ホール・大地

全席指定(前売料金)(税込)

一般 S席 六,〇〇〇円
A席 五,〇〇〇円
S席 三,〇〇〇円
A席 二,五〇〇円

チケット発売中

※当日券五〇〇円増

主催／財団法人静岡県文化財団、静岡県能楽鑑賞会、静岡新聞社、SBS静岡放送

後援／静岡県、静岡県教育委員会、静岡市教育委員会、清水市教育委員会

能高砂 たかさこ
狂言 宝の槌 たからのつち
仕舞 老松 ろうまつ
梅 うめ
岩船 かり
能熊野 ゆや

心開けば、能は楽し。

初春に美しき能二曲。

能は、決しておしやべりではない。が、だからといって無口かというと、そうでもない。それほどどこか俳句に似ている。余分なものをギリギリまで削ぎ落とし、二つの型をつくり、その極限まで省略されたものの中には、情感豊かな世界が広がっている。口数は少ないが、五感を研ぎ澄まして向きあえば、それはしっかりと語ってくれるのだ。

能のルーツは定かではないが、平安時代の物まねや寸劇を中心とした猿楽ではないかといわれ、猿楽の諸芸能が五穀豊稔能は今日に至る。

を折る民俗芸能や田楽と融合し、やがて猿楽から狂言が、田楽から能が作り上げられたといわれる。そして、南北朝・室町の時代、將軍足利義満の保護のもとで観阿弥・世阿弥父子によって、ようやく能は大成される。観阿弥がまず、優美な音楽性、舞踏性を取り入れて、新たな能の世界を拓き、それを息子世阿弥は幽玄美として完成させていたのである。その後、武家の式楽として江戸幕府に擁護されるといふ経緯を経て、

馴染みのない人々の間には、未だに能は一部の人たちのもの、敷居の高いものという意識がある。これについて、観世流能楽師観世芳伸氏は言う。

「江戸時代に幕府のお抱えになる前は、能楽師ではなく、能役者と呼んでいたんです。つまり我々もごく普通の役者で、能も芝居、芸能の一つに過ぎなかつたんですね。決して敷居の高いものじゃないんです。だから、普通のお芝居と同じように、知った顔の役者を見に行く位の気軽な気持ちで十分。もしも、役者の白足袋が気になったのなら、その足もとだけをご覧になつて、だけでも面白いと思いますよ。足もとに注目するうちに、その美しき、すり足という能独特の足の運びへと、興味も広がっていくでしょうし。謡にしても、実はそんなに難しい言葉を使つてゐるわけじゃないんです。ちゃんと聞いていたら、結構わかりやすいんですね、とおっしゃる方も多いですよ」

能をもっと多くの方に、とくに若い人たちに観てほしいという観世氏は、兄の芳宏氏ら観世流能楽師の方々とともに、グランシップで『能楽鑑賞教室』も開講。今年、二回目の教室が去る九月に開かれた。

「演者がどういう気持ちで舞台に立っているのかをお話ししたり、装束や面のつけ方を実演したり、普段お見せできない部分をご覧いただくことで、少しでも能を身近に感じていただけたらと。能は決して閉塞的なものではないんです。明治になって、女流能楽師というのが誕生したり。能家の出ではない方々も、実力次第で私たちと同じ舞台に立つこともできたりと、ある意味では歌舞伎よりずっと開けているんです。地謡という八人編成のバックコーラスが世阿弥の時代から存在してたとこのも、ある種斬新な感覚でしょう。既成概念を脱ぎ去って、もっと自然に『観ただければ、きつと能の面白さが発見できる』と思いますね」

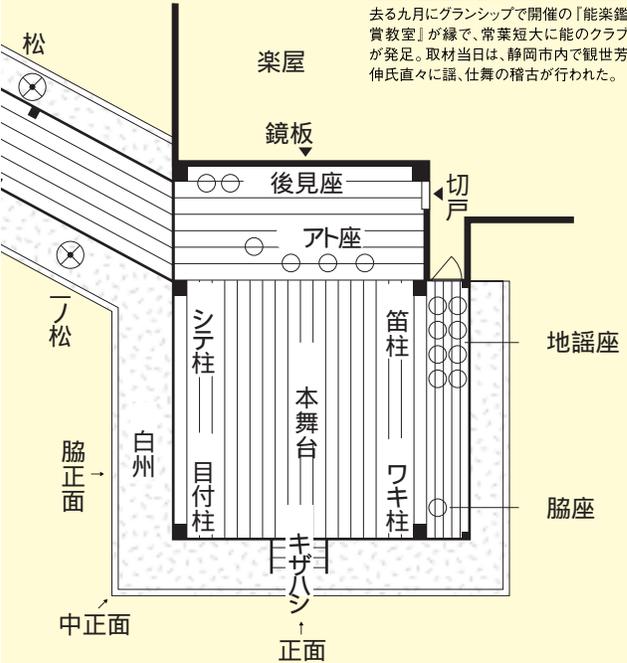


去る九月にグランシップで開催の『能楽鑑賞教室』が録で、常葉短大に能のクラブが発足。取材当日は、静岡市内で観世芳伸氏直々に謡、仕舞の稽古が行われた。



観世芳伸／観世流能楽師。二十五世観世流宗家観世左近(元正)三男。財団法人観世文庫常務理事。社団法人観世会理事。

キレイだな。変わつてゐるな。まずは、そんな発見から。能は楽しむためのものですから。(観世氏)



松に象徴される夫婦の和合と、颯爽とした祝福の神舞。

高砂 TAKASAGO

阿蘇の神主友成が、高砂の浦で松の木陰を掃き清める老夫婦に「相生の松」の謂われを問う。老夫婦は、古今集の序に「高砂住の江の松も相生のやうに覚え」とあり、和歌は今も栄え、松の緑も「生」の象徴として四季を通じて讃えられていると言つて、さらに自分は高砂住吉の神であると明かして姿を消す。住吉に着いた友成一行の前に住吉明神が現れ、長寿と平和を舞い祈る。

神を主人公とした「脇能」の中でもポピュラーな作品。松の木陰を清める夫婦の姿は、老境の閑雅な風情に春の趣が重なって、美しい世界を醸し出す。シテを務める観世氏曰く「祝言中の祝言ともいべき一曲。高砂と住吉に離ればなれに住んでいる理由を問われた老夫婦が、〈三千万里に隔つれども互いに通う心遣いの妹背(=夫婦)の道は遠からず〉と答える。このワキの一節が私はとくに好きですね」

用語解説

【間狂言】前ジテの退場から後ジテの登場までの間にシテに関する物語を語る「語り間」が代表的。一つの役柄として話の展開に加わる「アシライ間」、最初に出て場面設定する「口開間」などがある。狂言方が担当。

【謡】能・狂言の音楽。能の謡はフシとコトバから成る。フシは音階・発声法によってヨフ吟とツヨ吟に分かれ、リズムによって拍子合と拍子不合に分かれる。コトバは筋付けされていない部分。

【囃子】能・狂言の器楽。編成は笛、小鼓、大鼓、太鼓が一つずつ。太鼓が入らない曲もあり、入るものを太鼓物、入らないものを大小物と呼ぶ。

【仕舞】シテ一人で面も装束も着けずに地謡だけで紋服、袴で演じる舞。

【夢幻能】能の形式の一つで、旅人がある土地を訪れると、当地の者が昔話を聞かせ、自分がその人物だと言つて消える。やがてその人が霊として現れ、昔のことを語り舞つて消える。気づくと旅人は夢から覚めた、というのが典型的な筋。『檜垣』など。

【現在能】能の形式の一つで、現在の世界の出来事が時間の進行通りに描かれる。シテは生きている人間で、霊が過去を回想する夢幻能と対立。

【式能】徳川時代に江戸城本丸舞台で催された將軍家の能。

【神事能】神社祭礼の行事として奉納される能楽。

番組表の見方

① 観世芳伸	② 大西礼久	③
④	⑤ 殿田謙吉	⑥
⑦ 山本則孝	⑧ 園川 純	⑨ 坂井音重
⑩ 坂井音晴	⑪ 坂井音隆	⑫ 坂井音時
⑬ 木月宜行	⑭ 角寛次朗	⑮ 川原忠三
⑯ 津田和忠	⑰ 寺井宏明	⑱ 観世元伯

⑧囃子／右上が大鼓、右下が太鼓、左上が小鼓、左下が笛。太鼓が参加しない作品も。⑨後見／役者の後ろについて世話をする人。⑩地謡／謡を斉唱する役。シテ方が担当。通常八名。

窓越しの富士山が、まるで緞帳のように。



木坂 涼さん (詩人)

11月24日「しずおか連詩の会」の発表会へ参加の折に来館。

グランシップはお船をイメージして造られたって、タクシーの運転手さんが教えてくださるんですけど、そうかなあ、そんな風にも見えないなあと思つたら、こっち(西側)よりあっち(東側)から見た方がそれらしいですよ。(笑)だから、今はお船のどこかの二室にいるんだなあという気持ちです。さきほど会場(会議ホール)を拝見したら、正面の窓から富士山が、そ

れこそ緞帳のように見えて、本当に感激しました。やはり静岡は富士山、という思いがありますからね。しかも、それを褒めて下げてしまわないで、さうだろ？って見せる。これもつだと思えます。私は東京で11階に暮らしてはるんですが、部屋の左端に富士山が位置していて、夕焼けに光る空の端に富士山が見えたりするんです。それもまたキレイで、そういう意味では

富士山はよく見てるんですけど、間近に見るとやはり違いますね。今回「連詩の会」は大岡(信)さんが、この人にやらせてみてほしいんじゃないかと思つてくださったという、そのことが本当に嬉しくて。ドキドキものだったけれど、声をかけていただいてよかったと思います。スタッフの方々の対応も快くて、貴重な体験と共にいい数日間が過ぎました。

五番立て

◆現在、能の演目として認められている曲(=現行曲)は、およそ240曲。江戸時代に幕府の式楽となり、公的な催しの演奏が「翁付五番立て」とされて以降、この分類法が用いられている。しかし、現在は一日の演目を五番立てで組むことはほとんどない。

◆「能」に馴染みのない方は、飛んだり跳ねたり、スペクタクルな場面の多い、五番目物の切能からご覧になってもいいかもしれませんね。狐が登場する「小鍛冶」、蜘蛛の糸を投げる「土蜘蛛」など、観て面白い作品が多くなっています(観世氏)

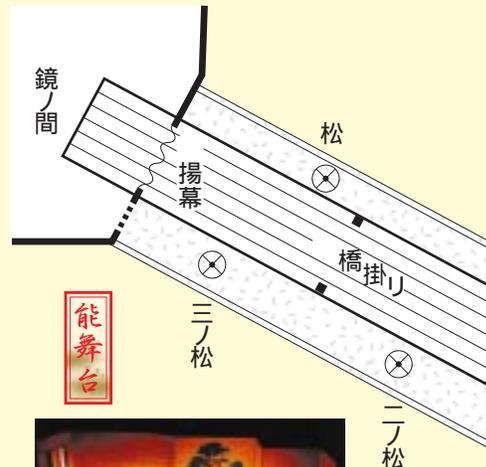
初番目物「神」しん	脇能。神体を主人公として天下泰平・国土安全・五穀豊穡を願う。
二番目物「男」なん	修羅物。源平の武将の亡霊たちが修羅道に苦しむ姿を描く。
三番目物「女」によ	變物。王朝の女性、草木の精、天人などが織りなすドラマと幽玄美。
四番目物「狂」きょう	雑能。物狂いをはじめ、執心、怨霊、人情などに属さない能の総称。
五番目物「鬼」き	切能。鬼、天狗、龍神等が主人公で、ダイナミックな演出の作品が多い。

能面

◆能面、またはオモテといい、メンとはいわない。シテとツレの一部だけがつけ、ワキはつけない。というのも、そもそも女面や男面ができる前は、シテは神や精霊、亡霊など人間以外のものを演じ、ワキは現実の人間を演じていたため。シテが面をつけずに舞台に立つこともあるが、それを直面(ひためん)といい、素顔も面であると考え。種類は250種に達するといわれるが、翁、老人(尉)、男、女、鬼神、怨霊の6つに大別できる。



◆「能面」で顔をすべて覆ってしまうのではなく、顎の線がみえるようにします。だから、面をかぶるとは言わず、かける、つけると言います。面によっては、鼻の穴からしか前が見えないこともあって、このとき舞台の四方の柱が目安になるんですね(観世氏)



- ①三間四方(京間寸法で約6m四方)の舞舞台。
- ②地謡が座る。
- ③ワキが座る。
- ④本舞台後方の張出し部分。手前に囃子方(右から笛、小鼓、大鼓太鼓)が座り、左奥には後見座がある。
- ⑤後見が控える。
- ⑥舞台正面奥の羽目板で、老松が描かれている。
- ⑦客席からの梯子段。
- ⑧能面を着けた役者が位置確認の目安にすることからこの名が付いた。
- ⑨ワキ座に近い柱。
- ⑩この近くにシテが立ち、ワキに相対する。
- ⑪笛座に近い柱。「道成寺」の鐘を吊る環が取り付けられている。
- ⑫地謡、後見などが使う小さな出入口。
- ⑬舞台と鏡の間を結ぶ廊下状の部分。演技空間としても使用される。
- ⑭橋掛りの奥に垂れた幕。両袖に結んだ二本の竹で上下し、役者が登退場する。
- ⑮舞台と楽屋の間に位置する。大きな鏡があり、役者はここで能面を掛け、装束を整えて出番を待つ。
- ⑯橋掛りの松/舞台上に近い方から一ノ松、二ノ松、三ノ松。演技の位置の目安になる。
- ⑰舞台を取り巻く白い石を敷き詰めた空間。

故郷の病母への思い。
桜の花の下、沈む熊野御前の心。

あらすじ

熊野 YUYA

熊野は、死ぬ前に一目娘に会いたいという老母の手紙を読み、平宗盛に訴える。が、宗盛は耳を貸さず、一緒に花見に行くことを強要する。清水寺までの道中は花盛りだが、熊野の心は沈んでいる。清水寺で熊野は仏前で母のために祈り、宗盛に命じられるままに花見の宴で舞う。にわか村雨降り、花を散らすので、熊野は母を思う和歌をしたためて宗盛に差し出すと、宗盛はようやく熊野に帰郷を許す。

見どころ

現在進行形の舞台経過(=現在能)でわかりやすく、さらに熊野の部屋、宗盛の館、道中、花見の宴、帰郷と場面展開もあり、芝居気のある作品。「熊野御前が母の手紙を読む(文の段)」は、一つの聞かせどころ。また、桜が散る場面では、歌舞伎や他のお芝居なら実際に花びらを散らせるところですが、能では熊野御前が扇で受ける型を示すことによって、それを表現しています(観世氏)

熊野	② 藤波重彦
① 讀次之伝	① 観世芳宏
④ 村雨留	⑤ 殿田謙吉
⑨ 大西礼久	⑧ 國川純
寺井 崇	住駒昭弘
⑩ 角幸二郎	寺井宏明
坂井音雅	田辺哲久
藤波重孝	高橋 弘
上田 成	谷村 一太郎
中島志津夫	中島志津夫

- ①シテ/主役。
- ②ツレ/シテに連れ立つ役。シテツレ。
- ③子方/子供の役者が演じる役。
- ④小書/特殊演出。曲名の脇に小さな字で書くため、この名が付いた。
- ⑤ワキ/シテの相手役。
- ⑥ワキツレ/ワキの助演者。
- ⑦周狂言/アイ。用語解説参照。

塩谷 哲

音のリアリティ。

「サントナにしても、矢井田瞳にしても、僕は同じものを感じていますよ。いいなあと思う人には、音にリアリティがある。それはいいミュージシャンがそうでないか、それぐらいはきりしたとたんと僕は思っている」

あるコンプレックス。

音楽という、ある種感性の世界に生きる人が口にした「リアリティ」という言葉が新鮮だった。クラシックであろうと、ジャズであろうと、正面からそれと向きあい、自分は何なのか、そう問いながら、正直に音楽を作っていくたいと彼はいう。自らが生み出すものに「リアリティ」を求める人の言葉は、こちらにまっすぐとどく。素直に胸を打つ。なぜなら、その言葉の一つ一つがまさにリアリティをもって投げかけられているからだ。

中学生のときに作曲された『海溝』は、未だに人気が高く、現在も印税が入ってくるほどと伺っています。

【しおのやさとる】

ピアニスト。作・編曲家。プロデューサー。東京芸術大学音楽学部作曲科中退。86～96年「オルケスタ・デ・ラ・ラルス」として活動。93年国連平和賞受賞。95年グラミー賞ノミネート。同年シング・ライク・トーキングの佐藤竹善とのデュオ「SALT&SUGAR」を結成。93年よりソロ活動開始。99年より3年に渡りクラシックを再構築したコンサート『Cool Classics』をオーチャード・ホールで開催、絶賛される。現在は自己のSALT BAND、SALT&SUGARの他、作・編曲家としてスピッツ、霧崎春女、岩崎宏美、中西圭三らの作品を手掛ける。また、サンタナ、パキート・デリベラ、渡辺貞夫、古澤巖、吉田美奈子、Kiororo、矢井田瞳ほか多ジャンルの音楽家と共演。66年東京都生まれ。



てしまったから。自分にとってクラシックというのとはとても大きくないので、それを勉強してたにも関わらず、近寄りないうようにしてたところがあるんですよ。やっぱり怖いから。深過ぎてね。だから、幸か不幸か、僕はそれを安直に扱うなんてことはできなくて、僕のクラシックへの取り組みは、自分だったらそうはしないよという、ある種のアンチテーゼでもあるわけです。僕なりに腹を括って、3年やってみて、本当に満足できる出来てあつたかというところ、そうともいえなけれど、それでも僕がやろうとしたことは伝わった気がするし、僕にしているクラシックとは、そういうものですよ。ある程度提示できたとは思ってます。本来、音楽というのは、ストリート・ミュージックも含めて、人間の高尚な娯楽であるという気がするんですよ。人間が動物と一番違うところは、音楽が作り出せることだと。たとえ歌詞がなくても、音だけで心が動かされる。それはとても神秘的で素晴らしいことだと思つし、そこを僕は求めたいんですね。でも、それは生活や環境、思想、人間性、生観に関わることだと思つたら、そういう音楽を作り出したのなら、これは本当に自分なのかと問いつながら、真摯な姿勢で音楽に向かつていかなければならないと思つわけです。音楽を書いたり作ったりすることは、決して軽い気持ちじゃできない。クラシックはその最たるもので、人生を賭けて書いているようなものだから、その作曲家の思いに立ち向かうというのには、本当に大変なことなんですよ。これまでにハービー・ハンコック、サンタナと、錚々たる面々と共演なさってますが、よく印象深い方いますか？」

「サンタナにしても、最近でいうなら矢井田瞳にしても、僕は同じものを感じるんですよ。いいなあと思う人には、やっぱり音にリアリティがあるんです。その人が音として出ている。それはいいミュージシャンか、そうでないミュージシャンか、そのどちらかしか存在しないみたいな、それくらいはきりしたことで僕はあるんですけど。ただ、サンタナくらいになると、そのリアリティというのはもう半端じゃなくて、ワン・アノンド・オンリーというか、絶対的なもので、例えば彼がそこにいれば、彼がギターを弾いてない瞬間だって、彼なんですよね。簡単に言えば、その人のオーラとか、エネルギーとか、そういうものなのかもしれないけれど、それをアンサンブルしているときなんかにお互いに感じるわけ。ぶつかり合う瞬間もあれば、溶け合う瞬間もあるし、ぶつかって化学変化を起して何倍にも膨れあがる瞬間もあつたりして、それを体験してしまつたら、もう音楽はやめられないなんていうと、オカルトチックに聞こえるかもしれないけど。(笑)でも、そこが感動を生む源なんじゃないかと思つたりするわけ。例えばいくら楽器が上手であつても、上手であることに感動するわけじゃないですよ。ピアノを早弾きしても、大道芸的に凄いとは思つても、ジーンとはこない。だから、僕よりピアノが上手い人は世界にたくさんいて、僕の存在意義がないとは思わない。もちろん楽器は上達したいと思つけど、でも、それ以上に、お前は何なんだ」という、そういう自分のリアリティを表現できるようなミュージシャンであり、アーティストでありたいと思つていますね」

3月には、グランシップのジャズ・ライブに大儀見元さん、金子飛鳥さんと揃つて登場というのですが、
「内容はまだ決まってませんが、ただ、いいコンテンツになるというところだけは断言できます。というのは、その二人というのは、凄く大きなものを持った二人なんです。初めて一緒に演奏して、4小節もたないうちに、この人とは一生つきあうだろうなと思つた人達で、そこまで通じ合えた人というのは今のところこの二人以外にいないんです。もちろん素晴らしいミュージシャンは大勢いるけど、自分と同じ言葉をしやべって、同じ匂いを感じられたのは、この二人だけなんです。だから、このメンバーでやれるというのはとても楽しみだし、そこでまた新しいものが生まれるんじゃないかと、僕としても非常に期待してると」



日本版フォープレイのようなポジションで何か面白いことをと、本田雅人(Sax)、青木智仁(Bass)、沼澤尚(Drums)と共に新ユニット「Four of a kind」結成。アルバムは1/23リリース。

チケット発売中

グランシップ ジャズ・ライヴ **3/8** (金)

塩谷 哲 Acoustic Trio

塩谷 哲 (pf) 金子 飛鳥 (vln) 大儀見 元 (perc)

PM6:00開場 PM7:00開演

グランシップ会議ホール・風

全席自由 4,500円 (1ドリンク付・税込)